

言語に障害のある子どもへのコミュニカティブアプローチ

牧野泰美（国立特殊教育総合研究所）

1. はじめに

近年、第二言語の教授法として、コミュニカティブアプローチは広く用いられている。また、言語に障害のある子どもの指導においても、コミュニカティブアプローチの理念は活用されつつある。構音障害や吃音に対しては、心理的な支援等を別にすれば基本的にはスピーチの側面への対応ということになるが、コミュニカティブアプローチの理念にもとづけば、標準的な構音や流暢な発話ができることそのものに比重をおくのではなく、聞き手に伝える、伝わることを重視することになる。言語の基礎的事項の発達に遅れが見られる子どもの場合には、語彙、文法等の形式的な正しさよりも、文脈・場面に適した利用を重視することになる。コミュニカティブアプローチの理念は、このように機能主義的な言語指導として言語障害教育に取り入れられているが、とりわけ言語の基礎的事項の発達に遅れの見られる子どもの場合には、読み書き能力の向上も含め、トータルに言語発達を支えることが求められることから、このアプローチにもとづく実践報告も比較的多く見受けられる。

本稿では言語に障害のある子ども、とりわけ言語発達に遅れの見られる子どもに対する言語指導の経緯を踏まえた上で、コミュニカティブアプローチの応用の観点及び今後の可能性について言及する。

2. 機能主義的な言語指導

従来、一般的に、絵カード（あるいは玩具等）を利用して、その名称を言う、順序を並べ替えて正しい文にする、といった作業を通じた言語指導は広く行われてきた。この場合、基本的には日本語の語彙や文法を絵カードや玩具を利用して子どもに記憶させるということが指導の中心となる。すなわち教師が用意した課題を子どもが身につけるという作業が行われ、そこで目標とされるのは、正しい語彙や、正しい文の習得ということになる。

しかし、指導の効果が上がらない、あるいはこのようにして習得した語彙や文法が、実際の生活場面では使えない、拡がらない、といった問題も指摘されるようになった。上記の指導は、語彙や文法といった言語の形式を学習するという作業にはなっているが、日常生活における言語活動の文脈・場面からは切り離された状況での指導であり、実際の言語の利用には結びつきにくいという指摘である。また、語彙や文法等、言語の形式的な側面が完全であっても、文脈に合っていなければ伝わりにくく、逆に形式的な側面が不完全であっても、文脈に適した使用がなされていれば、伝わるということにはさほど支障をきたさないことも考えられ、言語指導においても「伝える」「伝わる」という機能面を重視することの必要性が叫ばれるようになった。

そこで、言語指導をいかに日常場面に近い形で行うかが検討され始めた。日常の文脈・場面を利用した言語指導や、自然な会話に近い形での言語指導といったことの提唱である。子どもにとって日常生活においてよく経験し、興味を抱きやすい文脈・場面を設定し、そこでの会話を通して、文脈の中で言語指導を行うといった方法はその一つである（たとえば、長崎ら、1998）。当然、その文脈で自然に利用される語彙や文法が指導の目標となるが、それらの正しさよりも、その文脈の中で伝わるということが重視される。一方で、文脈・場面に密着した指導ということで、そこで身

につけた言語が、日常生活の同様な文脈で利用しやすい、般化されやすいといったこと、子どもにとって身近な、楽しみやすい文脈での指導は、身につけやすいといったことも言われている。さらに、言語の形式的な側面を重視すれば、子どもの言語の誤りを指摘し、正していくことになり、結果として話そうという意欲をそぐことにもなりかねないことから、自然なやりとりをベースとした言語指導の重要性も指摘されている。

これらの指導は、子どもにとっていかに意味ある文脈を設定するか、いかに文脈の構造化を図るか、その中でのやりとりの質、関わり方、さらには、大人の側がいかに自然な会話者になれるか、等の観点から実践及び議論が蓄積されつつある。

3. コミュニカティブアプローチの応用

以上に述べたような、文脈・場面を利用した指導、自然な会話を重視した指導等は、言語の語用論的な側面、機能的側面を重視した指導であることから、言語障害教育において、語用論的アプローチあるいは機能主義的アプローチ等と呼ばれている。この理念はまさしくコミュニカティブアプローチとして捉えることができる。コミュニカティブアプローチが第二言語の教授法の一つとして提唱された背景には、文型練習の不自然さや、文法学習により言語が上達するという考え方への反動的な流れが少なからずある。このような言語の形式よりも機能を重視する考え方は、たとえば「いかに正しく動詞を活用するか」よりも「いかにものごとを依頼するか」といった実用的な指導内容となって表れる。また、コミュニカティブアプローチは、聞く話すのみでなく、読み書きを導入したり、伝達に役立つという判断からは、他のアプローチの様々な方法も導入したり、かなり柔軟な教授法でもある。

以上から、コミュニカティブアプローチは、文法事項ではなく言語機能が学習内容となる（たとえば、「進行形」という文法事項を単元とせず、「人を勧誘する」という言語機能を単元とする）、話し手と聞き手の関係、立場、話題など様々な状況を設定した学習の展開（たとえば、ロールプレーなど）、日常生活における言語活動の題材としての利用、コミュニケーション手段のトータルな利用、文レベルではなく談話レベルでの学習、等々が実際の指導の形としてとられることが多い。

こうしたコミュニカティブアプローチにおいて、特に言語に障害のある子どものリテラシーを高める内容としては、日常生活における題材、たとえば新聞・雑誌の切り抜き、広告のテキスト、手紙などを題材に内容理解を深める、あるいは、日常場面を映像収録し、その場面を見ながら説明をつける、テロップを挿入するといったことなどが考えられ、もちろん、個々の興味や実態に応じることが必要であるが、かなり実際的な方法になりうると思われる。

4. 今後の可能性

これまでに、コミュニカティブアプローチの理念は言語に障害のある子どものリテラシーの向上を促す上で有益と考えられるものであること、及びその実践の姿、形を述べてきた。総じて、コミュニカティブアプローチは言語機能を重視した指導であることから、具体的な文脈、実際の言語活動が教材・題材とされる。知識としての言語を蓄えることよりも、実際に使うこと、伝えることが重要であることは、人がなぜ言語を利用するのか、人の言語活動の目的は何かといったことと深く関わる。たしかに、ある言語の構造等に関して正確な知識を蓄えたとしても、それが情報や情動の伝達に機能しなければ意味がないといっても過言ではない。

このような機能主義的な流れの中であって、聞く話すことはもちろん、読み書きの能力に関し

ても、伝えたい、知りたいという、言語を利用する人の内面が大きく影響することは言語指導を考える上で重要と思われる。日常生活の身近な文脈や、ニュース等を利用することは、そのこと自体、もちろん機能的ではあるが、その文脈やニュース等が、興味のあるものであること、好きなものであること、話し手と聞き手あるいは書き手と読み手の間で共感できるものであること、両者の関係を深めるものであること、等々の点を考慮することが、言語力の向上を図る上では重要と考えられる。

したがって教師は子どもと共にとりくめるモノ・コトを探し、それを楽しみながら、共に同じ感じを味わいながら、その中で、聞く、話す、読む、書く、といった言語活動を十分に行っていくことが、子どもの言語力を高めることにつながると考えられる。この意味では、教師は子どもの好きなモノ・コトに常に目を向けること、子どもの生活世界を十分見つめること、さらには教師自身が生活世界を拓き深めること、そして子どもとの関係を十分に深めること、等々が求められる。それは、コミュニケーションアプローチの有効かつ具体的な姿、形を生み出すことにつながっていくと考えられる。

本稿では、コミュニケーションアプローチの理念にもとづく機能主義的な言語指導の取り組みに、子ども及び教師の内面の重視、生活世界の重視、関係性の重視といった視点を加味しつつ実践・検討を行っていくことの必要性に言及した。今後の議論の蓄積・発展に期待したい。

文献

長崎 勤・佐竹真次・宮崎 真・関戸英紀（編著） 個別教育計画のためのスクリプトによるコミュニケーション指導－障害児との豊かなかかわりづくりをめざして－. 川島書店, 1998.